

Mining Frontiers of Siberia in the 1870s

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/5296 |

『シベリヤ日記』にみる鉱山業フロンティア

川 崎 茂

従来、筆者は19世紀の鉱山業の歴史地理に若干の関心を寄せてきたが、本稿もその延長上における一つの概括的な覚書である。

1. 『米欧回覧実記』と『シベリヤ日記』

かつて筆者は、「シエラネバダ越え周辺¹⁾の歴史地理—1846~70年代—」なる小論をものしたが、このなかで、久米邦武編著『特命全権大使 米欧回覧実記²⁾』（以下『米欧回覧実記』）にみられる、シエラネバダ西斜面のカリフォルニア砂金採鉱地に関する記述に、とくに着目した。この『米欧回覧実記』は、いうまでもなく、かの岩倉使節団が、1871年（明治4）11月12日（陽暦12月23日）に横浜を出航し、アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの米欧12か国を回覧し、1873年（明治6）9月13日（陽暦）に帰航した際の見聞実録を中心としたものである。なお、この『米欧回覧実記』は、日記風の叙述を柱としながらも、日記部分の後に、詳細な注記が加えられている。

ところで、『米欧回覧実記』の1871年12月24日の条に、前記シエラネバダ西斜面の砂金採鉱地における水力採鉱 hydraulic mining の様相などについて興味深い記述を展開し、カリフォルニアがオーストラリアやシベリアとともに世界三大産金地の一つであることに言及している。岩倉使節団一行は、12月24日の午前3時にカリフォルニアの州都サクラメントを出発し、1868年（明治元）に開通したばかりのセントラル=パシフィック鉄道で東へとシエラネバダ越えを急いだ。一行の米欧12か国回覧において、

産金地域を通り抜けたのは、このドナー峠越えルート³⁾のシエラネバダ西麓地方だけであったという。

それだけに、「後英国ニ留リ、露国ヲ過キ、世界ニ名高キ金礦ノ説話ヲ聞集メ、又世界ニ珍シキ天然ノ金塊^{あらま}モ一見シタレハ、此ニ其荒増シヲ述オクヘシ」として、世界の金鉱・金塊などに関する詳細な注記を前記12月24日の条に加えている。この注記のなかで、例えば、岩倉使節団が後にロシアの首都ペテルブルグ（聖彼得堡府、今日のレニングラード）を訪問した際に、鉱山博物館で見たシベリア産の大金塊のことなど記している。またシベリアについては、「露国細白里^{シベリヤ}ニ無類ノ純金ヲ出ス礦アリ（中略）若シ含金ノ量甚寡^{すくな}ケレハ、開採シテモ得失相償ハス、細白里地方ニ如此ノ礦ハ甚多ケレトモ、開掘セシテ棄タルモノ、数百ヶ所アルト云」といったような記述もみられ、世界の主要産金地シベリアに対する関心の程を窺い知ることができる。

さて、かかるシベリアの産金については、1874年（明治7）6月以来、ロシア駐在特命全権公使の任にあった榎本武揚（1836~1908）が、前記『米欧回覧実記』が刊行された1878年（明治11）に、シベリア経由で帰国した折の『シベリヤ日記』に、注目すべき多くの記述がみられる。本稿では、この『シベリヤ日記』にみられる産金関係の記述などにとくに着目し、若干の検討を加えてみたい。

さきの『米欧回覧実記』は、岩倉使節団帰国後5年過ぎたばかりの1878年（明治11）に、銅版・活字による太政官記録掛刊行として、御用刊行所の博聞社から発売された。それに対し、『シベリヤ日記』は、榎本武揚の帰国後約61年を経た1939年（昭和14）に、

はじめて活字本として、南満州鉄道株式会社総裁室弘報課から発行（非売品）された。³⁾ なお、『シベリヤ日記』の原本、すなわち武揚自筆の日記は、大小二冊の洋帳からなるが、これが漸くにして発見されたのは、実に武揚死後15年余も過ぎた関東大震災直後のことといわれる。その後、武揚の息子榎本春之助による写本が、1935年（昭和10）に海軍有終会から写真版として出版された。しかし、活字本刊行の挙に出たのは、前記のように南満州鉄道株による刊行をもって嚆矢とした。

2. 『シベリヤ日記』の周辺

『シベリヤ日記』の著者榎本武揚の伝記については、加茂儀一の著作などに詳しいので、ここでは『シベリヤ日記』の周辺・背景として、維新当初の武揚と彼を取り巻く当時の内外情勢に少し言及するにとどめたい。

維新当初の日本外交にあつて、征韓論とともに、ロシア問題、とりわけ樺太帰属問題が重大な懸案事項であった。岩倉使節団が1873年（明治6）9月に帰国するや、その直後に征韓論、ロシア問題ともに、新しい展開をみせるに至った。1873年10月の閣議で征韓論が最終的に敗退し、翌1874年2月に佐賀の乱、1877年（明治10）2月に西南の役が勃発したことは周知のことである。一方、樺太帰属問題については、ロシアとの交渉のために、明治新政府は、1874年1月、榎本武揚に対し、海軍中将兼特命全権公使露国公使館在勤を命じた。

幕末以来、北辺の脅威として、ロシアに対する恐怖観念が必要以上に日本で強まっていた。前記の『米欧回覧実記』にも、岩倉使節団が、ペテルブルグの訪問を終えてロシアを離れる1873年4月15日の条で、「歐羅巴ニ於テ、最モ勢力アル国ハ、英、仏、日、塊、露ノ五帝国ヲ推ス（中略）其内ニ於テ最モ雄ナルヲ英仏トス、最モ不開ナルヲ露国トス（中略）今ニ至ルマテ、日本人ノ露国ヲ畏憚スルコト、英仏ノ

上ニ出ツ（中略）只露国ノミ最大最強ニテ、常ニ狼視虎歩シテ、世界ヲ并呑スル志ヲ抱クモノナリト謂フカ如キハ、衆口一談、曾テ疑ヲイル、モノナシ、抑此妄想ヲ日本人ノ脳神ニ感触セルハ、何ノ原因ナルヤヲ推究スレハ、蓋シ故アリ」などと記し、ロシアに対して従来日本人が抱いていた妄想虚影の論は排斥すべきであるとしている。かかる新しいロシア観を抱いて岩倉使節団が帰国したとしても、それが榎本武揚のロシア派遣にいかなるつながりをもったか、ここでこの問題に触れるだけのものを持ち合わせない。

ところで、箱館戦争の旧幕府方首領であった榎本武揚が、何故にロシア駐在の特命全権公使に選ばれたのか。かかる興味深い問題について、箱館戦争以来続く旧薩摩藩士黒田清隆らとの関係などから、さきの加茂儀一は検討を加えている。ここでは、榎本武揚が死罪を免れた上に、1872年（明治5）正月に赦免出獄するや、開拓次官黒田清隆の勧告で開拓使出仕の任に着き、北海道開発のための先駆的な地質・鉱物調査に乗り出していることにまず注目したい。

開拓使はすでに1871年（明治4）に最高ブレンとしてケプロン（H. Capron）を、さらに翌1872年には地質兼鉱山師長としてライマン（B.S. Lyman）を聘用したが、かかる聘用外国人とともに、榎本武揚は北海道調査に先駆的な役割を果たした。武揚の1873年にかけての調査活動については、『北海道巡廻日記』⁵⁾や、開拓使宛の報告書である「イクシベツ石炭調査」⁶⁾などの資料によって明らかである。例えば、「イクシベツ」石炭山（幌内）や「ソラチ」河石炭山（空知）などの石狩炭田調査において、武揚は外国人技師に比肩しうる重要な先駆的役割を果たし、また彼は後志の岩内石炭山や釧路方面の石炭山、さらに道東地方などの砂金場の調査にも乗り出した。かかる事柄が、後述する『シベリヤ日記』の記述内容を理解する上に、その背景として重要な意味をもつと考える。

しかし、榎本武揚は1年半余の北海道滞任にして、前記のように、1874年（明治7）1月には一躍海軍中將に任ぜられ、特命全權公使としてロシアに赴くこととなった。この1874年の2月には、奇しくも初代開拓使長官を務めた鍋島直正の膝元で、前記した佐賀の乱が起り、開拓使判官として札幌の都市建設などに活躍した島義勇が、その乱の首謀者として征韓論者の江藤新平とともに処刑されたのは、榎本武揚の生涯とはまさに対照的というべきであろう。

なお、黒田清隆らが、開拓使出仕や駐露特命全權公使任命に当たって、旧幕臣の榎本武揚に強く固執した背景として、武揚が国際的識見豊かで、外国の学問や技術に造詣の深い貴重な存在であったことが指摘される。武揚は、まず江戸本所の英語塾で、かのジョン万次郎こと中浜万次郎らの影響で外国事情に興味を覚えるに至ったとされ、後に勝海舟と同じく、長崎の海軍伝習所で蘭学を勉強した。さらに武揚は、『渡蘭日記』も残しているように、アフリカ南端を迂回して、1863年（文久3）4月オランダに渡った。3年半に及ぶオランダ滞在中に、軍事技術や鉱物学、化学、国際法などを学んだという、当時数少ない外国通であった。箱館戦争最後の段階で、黒田清隆は、敵將武揚から貴重な国際法規の『海律全書』を託されたと伝えるが、それ以来、清隆が武揚なる人物にとりつかれたといっても過言でなからう。

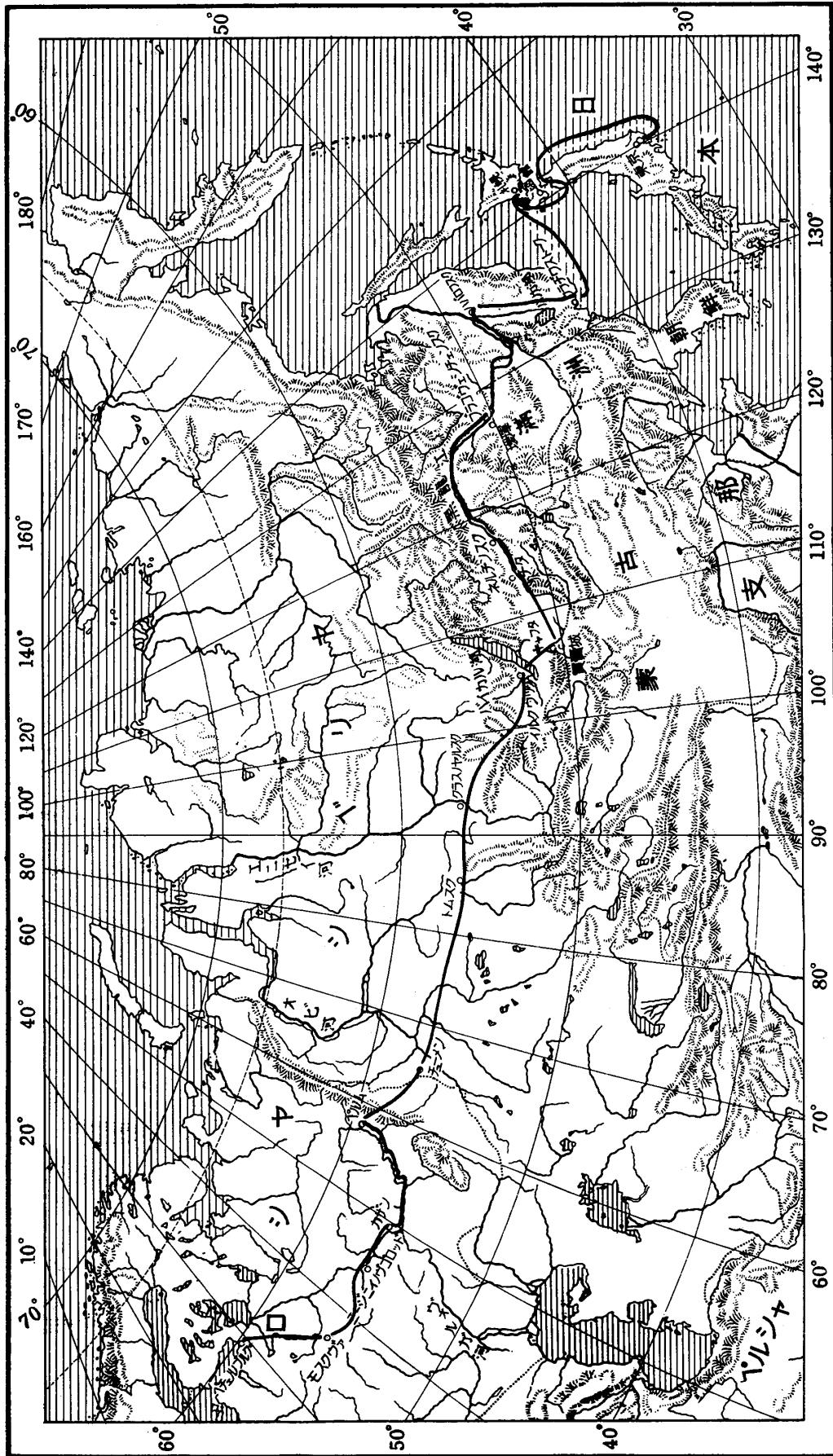
ともあれ、榎本武揚がロシアに赴任すべく横浜を出航したのは、岩倉使節団帰国翌年の1874年（明治7）3月10日、彼はスエズ経由でヨーロッパに渡り、ベルリンなどを経て、同年6月10日ごろロシアの首都ペテルブルグに着任した。そして樺太問題などの交渉に入り、1875年5月7日に千島・樺太交換条約を調印するに至った。彼は1878年（明治11）7月までの4年2か月にわたってロシアに滞在し、その間ヨーロッパ各地を旅行して見聞を広め、当時のバルカン情勢にも強い関心を抱いた。とくにペテルブルグでは、日本に近い東シベリア方面の諸資料の収集

に努め、鉱物学などの勉強にも励んだ。そして注目すべきは、彼が帰国に当たり、あえてシベリア経路を選び、1878年7月26日にペテルブルグを出発し、ウラジオストクに向け、シベリア横断の旅についてのことである。

榎本武揚がシベリア経路で帰国する決心をした動機については、例えば、彼がペテルブルグから東京の留守宅に送った書翰のなかにみられる、次のような記述からも推察することができる。1877年（明治10）1月1日に書かれたこの宅状には、「かれこれする中当表出立之期も相迫り可申、「シベリヤ」通行は誠に楽しみにて見るべき事定めて多からんと存し候もの、一旦ふみ出したらば壱日も早く帰国いたし度ならんかと自分なから我を信じがたく候、一体日本人はロシアを大に畏れ今にも蝦夷を襲ふならん杯といふは、ハシニモ棒にも掛らぬ当推量にて、中々左様の訳には無之とは知れど、今手前身分はこの上もなきよき折から、「ロシア」の領地を旅行して、日本人の臆病を覚し、且は後来のためを思ひて、実地を経て一部の書をあらはし候心組に御座候、日本政府もひたすら此事を望み居候」といった記述がみられる。このように、当時日本人はロシアに対して強い恐怖心を抱いていたので、この際特命全權公使の身分を利用してシベリアを実地に旅し、もって日本人の臆病を覚まし、かつ後のために役立つべく、「一部の書」を著わすつもりだと書いている。この「一部の書」が、いわゆる『シベリヤ日記』であるが、しかし、前述のように、これは関東大震災直後に発見されるまで長年埋もれたままであった。

3. 『シベリヤ日記』のコースと内容

『シベリヤ日記』は、榎本武揚が、1878年（明治11）7月26日にペテルブルグを出発し、後記のコースを経て、同年9月28日にウラジオストク北方のハンカ湖に入るまでの約2か月にわたる旅行の日々を、主に毛筆で書いたものである。このシベリア横断の



第1図 榎本武揚通過路 (1878)

(南満州鉄道株式会社発行 (1939) : 『榎本武揚「シベリヤ日記」活字本』, 写真6ページ転載)

旅は、1891年(明治24)のシベリア鉄道起工より実に14年も前のことである。同行の日本人は、ペテルブルグで銅版研究をしていた大岡金太郎、留学生の寺見機一、ロシア語通訳の市川文吉の3名だけで、時に武揚は43歳であった。なお、旅行コースの概略は次のようである(第1図)。

まず首都「^{ペテルブルグ}彼得堡府(レニングラード)から「モスコ」を経て「ニヂノフゴロット」(ゴーリキー)までは汽車を利用した。「ニヂノフゴロット」からは「オルガ」川(ボルガ川)を「火輪船」(汽船)で下り、「カザン」を経て「カマ」川を遡り、ウラル山脈西側の「ペルム」(ペルミ)に至った。

この「ペルム」からは、ロシア特有の半有蓋旅行馬車である「タラントス」を利用してウラル山脈を越えた。後、「エカテリンプルグ」(スベルドロフスク)、「チューメン」(チュメニ)、「トムスク」,「カラスノヤルスク」(クラスノヤルスク)などを経て、「イルクーツク」へと馬車の「タラントス」による長い旅が続いた。8月3日に「ペルム」を出立して、「イルクーツク」に着いたのは8月28日で、この間実に25日余に及ぶ長い馬車による苦難の旅であった。

「イルクーツク」近くから「バイカル」湖を渡った後は、馬車の「タラントス」で、中国(モンゴル)国境の「キャクタ」(キャフタ)、さらに「チタ」,「ネルチンスク」などを経て、9月11日には、アムール川(黒龍江)上流水系のシルカ川右岸の「ストレチンスク」(スレテンスク)に至っている。

9月13日、この「ストレチンスク」から「アムール」社の汽船に乗り、シルカ川を下って「黒龍江」に入り、「ブラゴウェスチンスク」(ブラゴベシチェンスク)を経て、同月21日に「ハバロフカ」(ハバロフスク)に着いた。この間の船旅は10日余に及んだが、「ハバロフカ」から「ウスリ」行の汽船に乗り換え、ウスリー川を遡ってハンカ湖に入ったのが9月28日であった。日記はこの9月28日で一応終わっているが、後は馬車や汽船などを乗り継いで、同月29

日にウラジオストクに到着している。

この日記の内容については、まず武揚の息子榎本春之助が、さきの海軍有終会出版の「写本序」(1934)において、「本日記ヲ読ムニ経過地方ノ人情風俗地勢土味ハ勿論、農工商ノ諸事情及ヒ鉱業殊ニ砂金ノ採取並ニ政治経済軍事ニ亘リ、又時ニ魯国ノ極東政策ニ関シ筆マメニ書カレアルヲ知ルベシ」(傍点筆者)と記している。さらに最初に活字本を刊行した南満州鉄道(株)の総裁大村卓一による「活字本序」に至っては、日記の内容について、次のような高い評価を与えている。長くなるが、ここであえて引用しておきたい。

「当時、シベリヤの行旅は主として馬車及河船に依った、め、その長途に亘る苦痛は甚大であったし、且旅籠の深更、毒虫に悩まされたことは筆舌に尽し得ぬものがあつた。然も彼の地位に在って此の困苦を排し、二箇月の旅中、犀利なる観察眼を以て克明な記録を留めたことは到底常人の企及し得るところでない。其の時代のシベリヤ地方の政情・経済・軍事・文化施設等の諸面の把握は言ふ迄もなく、或は地質・鉱物・地理・植物・化学等の自然科学に、或は機械工学・言語学等にまで、万般の事象に対して詳細なる見聞を求め、一都市に入っても其の市勢を聴取し写真の蒐集に努め、地方の要人のみならず馬夫と相語り農民に接してまで人情を探るなど、其の着眼、其の方法、共に平凡でない。シベリヤ在住民の生活竝民俗は著者の優れた科学的知見と相俟って日記中の随処に織込まれ興味津津たるものがある。而も此等の記録を物するに当っては、蘭・露・英・独・仏・漢・蒙の各国語が駆使されたことは全く敬嘆の外ない。此の日記たるや、逆旅身神疲労の裡にも筆は擱かれず、又河上汽船の動揺中にも執筆が続けられて成つたがために、実証的な資料として不易の高い価値を有つものと信ずる。」

ともあれ、『シベリヤ日記』は、種々の側面から十分に評価しうるだけの貴重な内容を有することは言

を俟たない。上記の「活字本序」には、シベリアの流刑、産金ほかなど具体的な事柄については言及していないが、本稿でとくに着目する「沙金場」関係の記述など、日記には目立って多い。さきの榎本春之助の「写本序」にも、「鉱業殊に砂金ノ採取」などが筆忠実に書かれていることを指摘している。事実、8月の1日・6日・15日・17日・18日・19日・29日、9月の8日・9日・10日・12日・13日・15日・16日などの日記の条で、砂金・金鉱関係の記述を見出すことができる。

4. 『シベリヤ日記』にみる「沙金場」

(1) イルクーツクへの旅路

中部ウラル東斜面の「エカテリンブルグ」(スベルドロフスク)における、8月6日の条には次のような記述がみられる。

「直チニ府外ニ「ウォルスト」許ノ小丘ナル地即沙金場ヲ訪フ、此沙金場ハ十五年迄ハ政府ノ働キシ処ナレトモ爾來抛チテ働カズ、現下ニヶ月前ヨリ当府の一巨商「パウミハイルウィチ、オシユルコフ」ナル者兄弟三人ニテ掘試ニ従事セリ(中略)其洗方ハ本邦ノ洗金師ノ手際ニ全ク異ナラズ、甚タ熟練ナル者ナリ、予ハ之ヲ見テ先日「クンヌイ」十勝等砂金洗ヒノコトヲ思ヒ出セリ(中略)掘主ハ予ガ為ニ二十「プード」ノ土ヲ掘ラシメ之ヲ洗ヒ水銀ニテ「アマルガメート」シ而シテ之ヲ鉄皿ニテ水銀ヲ蒸発セシメ(火ニ焼テ)而シテ之ヲ目方ニ掛テ見タルニ砂金二十二「ドリ」アリタリ(中略)掘主ハ此金ヲ予ガ記念ノ為メニトテ予ニ送レリ(中略)予ハ金ノ多量ナルニ驚ケリ、然レトモ是レ恐ラクハ掘主予ニホスタメ洗器中へ預(豫)メ洗ヒ置キシ良沙ヲ交ヘタルナルベシ」〔「ウォルスト」:露里(1露里は約1哩)〕

このように、「エカテリンブルグ」近くの「沙金場」訪問の様子が詳細に記され、苦笑を禁じえない内容をも示すが、武揚は北海道の十勝地方などで砂金洗いをしたことを思い出しながら見学したとある。こ

の「沙金場」は、かつて官営であったが、当時は民営に移行されていたという。なお、日記の8月1日の条には、「魯領一般鉱山ハ私有スルト官ヨリ借用スルト二種類アリテ何レモ許可ヲ得ベク、而シテ人皆大抵借用ヲ好ム」とある。またこの「沙金場」で、当時、陶金法として水銀を用いる混合法 amalgamation がみられていたことを前記引用文は示すが、かの『米欧回覧実記』にみるシエラネバグ西麓の混合法関係の記述が想起され、まことに興味深い。

8月6日午後6時に雨のなか「エカテリンブルグ」を出発した一行は、「本日モ罪人百人以上「タランタス」ニテ「シベリヤ」へ送ラル、者ヲ見ル、或ル村ニハ此罪人ノ投宿所入口ニアル者アリ」(8月7日)などの情景に接し、8月8日にはロシア政府の定めたヨーロッパとシベリアの境の標石を目撃した。その8日の午後、一行はシベリア最初の都市「チューメン」府に着き、西シベリア大鎮台カツナコフ氏の命で設けられた旅宿に入った。武揚は、この「チューメン」府に入る直前の記で、「五年故国ヲ離レ今シモ任所ヲ発シテ帰国スル者ノ目ニサヘ深秋肅殺悲愴ノ念ヲ起サシムレバ、夫ノ罪ヲ負テ「シベリヤ」ニ送ラル、罪人等ノ胸裏ハ如何ナラント察セラレタリ」と、シベリア送りの罪人に思いを馳せている。後、長い苦難のシベリア街道の旅が続き、8月15日にはオビ川上流の「トムスク」府に到着している。

この「トムスク」の8月15日の条には、次のような砂金関係の記述をみる。すなわち、「「トムスク」府ハ脂穀類沙金等ニ富メリ」とあり、さらに「鎮台云ク「トムスク」府追々「オビ」河ノ運輸盛ナラバ繁昌スベキ目的アリ、又云ク「マリンスク」ヨリ壱百五十「ウォルスト」許ノ処ニ沙金ヲ産スル多ク人々小「カピタル」ヲ以テ各自ニ働キ居レリ、然レトモ毎年金一百「プード」ヲ出セリ」と記す。この引用文にみる「マリンスク」には8月17日に着いているが、この17日の条には、「「マリンスク」ト云フ邑ニ着ス(中略)当所ヨリ八十里(ウォルスト)ニシ

テ沙金場アリ、金ヲ洗フ者ハ免状ヲ得テ而後其開採ノ高ニ応シテ若干税ヲ納ルト云フ、尤モ採タル金ハ一粉タリトモ政府ニ売ラザルベカラズト云フ」とあり、「沙金場」の仕組みを示す。

東シベリアの「エニセイスク」県に入った翌8月18日の条には、次のような流刑地の「洗金場」に関する記述がみられる。すなわち、「「アーチンスク」ト云フ邑ニ着ス、役人出テ食事ノ用意備リ居ルユヘ休憩セズヤト頻ニ勸ムルニヨリ休憩ス、此邑ハ人口三千余アリ（中略）此邑ニ流ル、「チュリム」河ニハ沙金アリ、此邑ヨリ六十「ウォルスト」ノ処ヨリ洗金場アリ（中略）此邑ニハ特権ヲ全ク剥レタル罪人ヲ移セリ、此罪人ニモ地ヲ与フ、然レトモ金ハ自ラ洗フ能ハス、只人ニ僦ハレテ洗フコトハ許セリ、罪人ニ嫁セント欲スル村女アルトキハ其賞トシテ政府ヨリ五十「ルーブル」ヲ与フ、罪人ハ邑中ニ住ムヲ得ズ、田舎ニ住ムヲ得ルノミ」といった実に興味深い記述をみる。かかる罪人については、さきの8月15日「トムスク」府における条でも、「懲役罪人ハ来ラズ、只謫流セラル、罪人ノミ来ル（中略）只通例人家ノ奴僕トナル者多シ、既ニ鎮台ノ家ニアル奴婢ハ皆罪人ナリト鎮台自ラ語レリ」と、その状況について記している。

ところで、さきの8月18日の条をみると、人から「「カラスノヤルスク」府ヨリ二日ヲ費セバ好き洗金場アリ」と聞き、「カラスノヤルスク」で投宿することに決めて先きを急ぎ、夜1時にここに着いたとある。翌19日に郡警察署長「クリンゲンベルグ」氏が馬車及び食物の仕度をして「洗金場」の案内に来り、エニセイ河畔に沿って現地へ赴いた。しかし、この後の20日・21日・22日の3日間の日記がなく、その「洗金場」現地の様子がわからない。ただ日記帳に残された覚書からは、「カラスノヤルスク」県内ノミニテ洗金場百八十ヶ所アリ」とか、「人民自身ニテ沙金杯ヲ見出セシナリ、他国人民モ洗金ノ免許ヲ得ルナリ」、「金ヲ洗フハ別ニ税ヲ出サスコトナシ、「シ

ベリヤ」一般皆然リ、罪人ニアラザル以上ハ何人モ開採スルヲ得ルナリ」ほかなどの記を拾うことができる。

8月28日の午後、一行はイルクーツクに到着した。この日の日記には、「「イルクーツク」府ハ、「アングラ」河ヲ渡テ向岸ニアリ、人口三万五千ナリト云フ」とか、「実ニ「シベリヤ」ノ「ペテルブルグ」ト名クルモ虚ナラズ」などと記す。また、「予ガ車河ヲ越ルトキ「ポリシーメーストル」ハ正服ニシテ迎出テ先乗ヲ為シ、又「カザク」ノ騎兵二騎ニテ我等ノ車前後ヲ擁セリ、河ヲ渡リ了ルト府門アリ、頗美ナリ、此渡口ニ大学校ノ生徒十数人白衣ヲ着テ出迎タリ、又見物人モ多カリシ、只皆慎テ一語モ吐クモノナク皆帽ヲ脱シテ礼ス」のように、武揚一行に対する歓迎の様子を記している。

8月29日は終日イルクーツクに滞在し、東シベリアの軍事、屯田兵関係の情報なども探っているが、とくに政府の鑄金場を訪問している。そして、「此場ニテ東「シベリヤ」各地方ヨリ出ス沙金ヲ鑄テ棒ト為シ彼得堡ヘ送ルナリ」など記す。砂金の熔場ハ、東シベリアのイルクーツクと、西シベリアの「バルナウム」、「エカテリンプルグ」の3か所にあつたが、イルクーツクのものが最大であつたという。また、同29日の日記には、「館主云ク、東「シベリヤ」ヨリ出ル沙金ハ并テ約二千「プード」タリ、東西「シベリヤ」ヲ合スレバ毎年二千五百「プード」ニ及フベシト、館主ノ妻ノ父ノ洗金場ニテハ毎年四百「プード」ヲ出スト、但シ多クハ「ヤクーツク」県ニアリ、「イルクーツク」府ヨリモ何レモ一千「ウォルスト」ヲ隔テ、好き沙金場アルナリ」と記す。なお、上記引用文中の「館主」とは、武揚一行がイルクーツクで宿泊した家の主人「ゲネラル・シーウェルス」氏のことである。同日日記の「沙金」の条には、「「シーウェルス」氏ノ妻父ハ現ニ七十五ヶ所ノ洗金場アレトモ、洗ヒ居ル者ハ二ヶ所ナリ、他所ハ採ラサレトモ納税ス、磐ノ凹処二十五「プード」ノ金ヲ

得シコトアリ、又熔金場ニテ見タル十五「フント」ノ金塊モ同氏ノ妻父ノ場所ヨリ出シ者ニ係ル」といった記述もみられる。さらに、同29日の日記には、「東西「シベリヤ」共ニ皆沙金ニシテ「クワルツ」金ニアラズ、「クワルツ」金ハ「ウラル」ノミ、「ザバイカル」州ハ最モ好沙金場ニ富メリト、附添大佐云ク、「シベリヤ」ハ金多キヲ以テ人々皆金ヲ洗テ金ヲ得ルニ汲々タルヲ以テ他ノ製造場ヲ立ル者更ニ無シ、且ツ各府ノ傭夫ノ廉価ナラサルモ皆金ノ為メナリ」など興味深い記述が続く。

(2) アムール川（黒龍江）水系

8月30日イルクーツクを出立した後、9月1日には中国（蒙古）国境の貿易場である「キャクタ」（キャフタ）に到着している。翌2日には中国領に入ってみるなど、中国側に深い関心を示し、人種・言語・宗教・貿易・軍事のことなど、この国境付近の様相について、9月初の日記に連日詳しく書いている。

後、アムール川の上流シルカ川水系に入り、「チタ」府を経て、9月8日、「北風甚烈寒気五度タリ、是迄ニナキ悽然タル景ナリ」のなかを、午後6時ごろ「ネルチンスク」府に入り、「巨商「ブーチン」氏」の家に宿泊した（第2図）。「ネルチンスク」府は、人口約3,500、人家400軒ばかりの一小府であったが、当府の商売はこの巨商「ブーチン」氏の手の中にあつたと、10日の日記にある。この10日の日記に、「予ハ沙金場に赴キシヲ以テ「ネルチンスク」府ヲ見ルノ暇ナカリシ」と書いているように、9日・10日のなか2日間のネルチンスク滞在は、「沙金場」見学が主な目的であった。

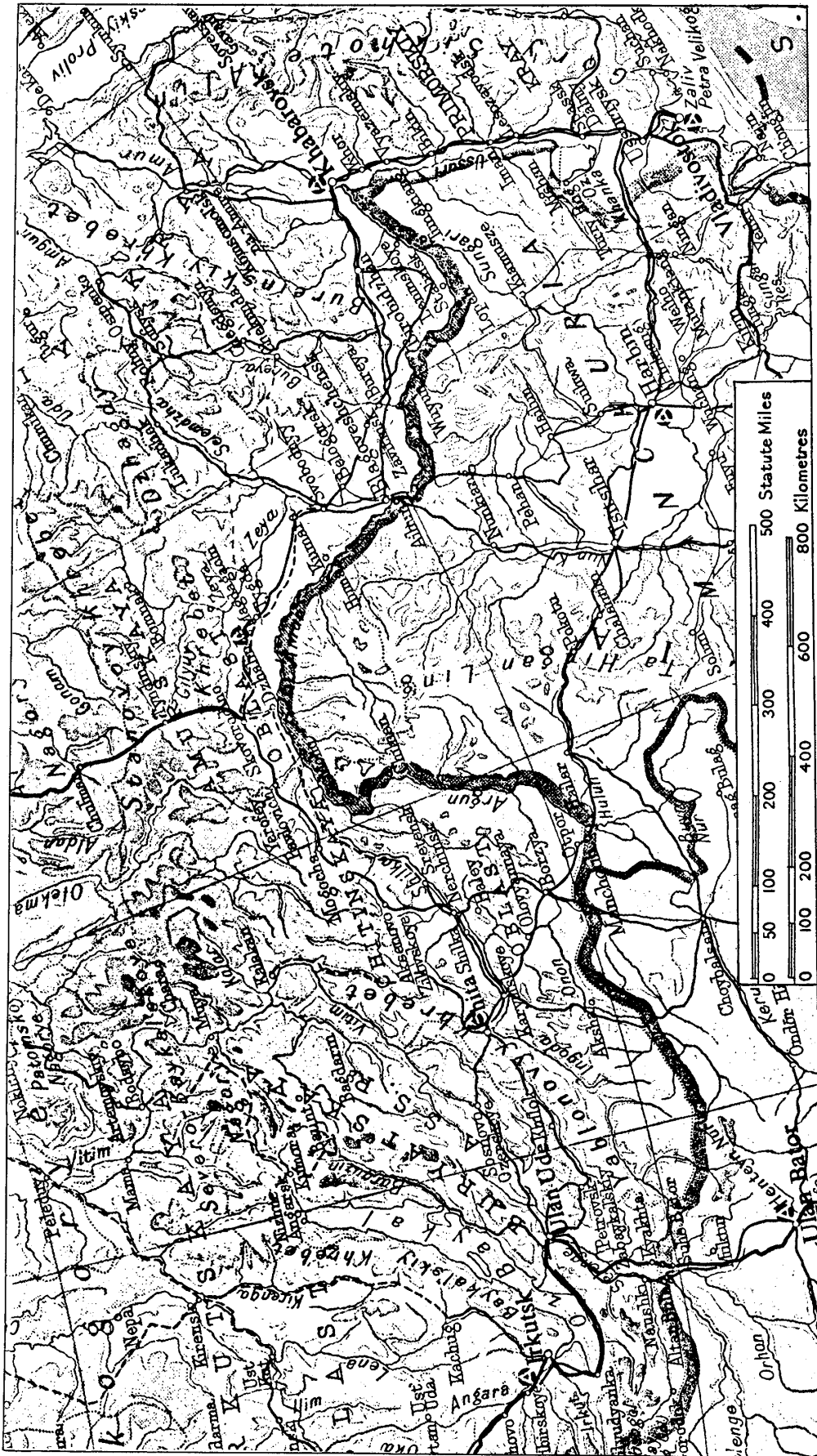
まず9日には、午前5時に起床して、巨商「ブーチン」氏の「沙金場」である「ブーチンスク」の見学に赴いた。「ブーチンスク」は、「ネルチンスク」ヨリ東南八十三「ウォルスト」の場所にあり、「道路ハ山坂アリト雖トモ甚タ悪シカラス、「ネルチンスク」ヨリ六十「ウォルスト」許ニシテ山ニハ松樹多シ、天気ハ午前寒クシテ本邦十二月雪天ノ如クナリ

シガ午後北風モ止ミ天晴テ小春ノ景アリ」のなか、「三時半沙金場三ヶ所中ノ大場ニ着ス」とある。そして、「着后直チニ番頭等一同ト共ニ沙金場ヲ周覽ス、事ハ別紙ニ詳ナリ、夕七時半番頭ノ住メル本屋ニテ夜食シ夫ヨリ洗ヒ上ケ及「カントール」(事務所)等ヲ見ル、此処ハ夜中モ働クナリ、松薪ヲ燃シテ以テ燭ニ当ツ、其景甚盛大ナリ（中略）本日「ツングーツ」人ヲ見ル、「ブリヤト」ヨリモ美ナルニ似タリ、只水草ヲ逐フト云」などと記している。

翌10日には、上記「沙金場」を出て、ネルチンスクへの帰路にある「沙金場」を一見しているが、これについては、「是ハ一番始メニ開採セシ者ニテ十二年前ヨリス、此処ハ水モ稍多キヲ以テ水車ニテ働ク、「エニセイ」ニテ見タル仕掛ニ均シ、極テ「シンプル」ナリ（中略）此処ニ掛レル人夫ハ并セテ百六十人ニシテ毎日四万五千「ブード」ノ土ヲ洗フ、此処ハ水溜レノトキ休業スルコト多シ」と記述する。さらにここより、「二「ウォルスト」帰路ノ方ニ」、また別の「洗金場」があり、「四年前ヨリ働ク所ナリ、是ハ番頭別人ナリ、而シテ人夫ハ二百人ニシテ毎日四万二千「ブード」ノ土ヲ洗フ、金ハ四十「ドリ」ニ過キズ、機関十五馬力ニシテ「ボチカ」ハ一ナリ」などと、その様子を記す。この「沙金場」を一見した後、夕方7時ごろネルチンスクに帰宿した。

この「ブーチン」氏の宿で、「偶「チタ」領内ノ銀山等地方一千五百「ウォルスト」を巡回してきた、「チタ」の鎮台「ペドシェンコ」氏と会い、「ブーチン」氏をも交えて夕食をともにした。21年間シベリアに住む「ペドシェンコ」氏から、「「ツングーズ」ノ魯村ニ住ム者ハ今皆魯種ト混化シテ言語モ其根源ヲ知ルヲ得ズ」など、種々情報を得た。

翌9月11日朝、ネルチンスクを出発、「途次雪雲四^{アレ}合甚タ慘澹ノ景色ナリシガ稍久シテ雪ハ霰ト共ニ降り来リ」のほか、「アムール」杜の汽船乗場のシルカ川右岸「ストレチンスク」村に到着した。翌12日は、「村ニシテ未タ邑ヲ為サス」とある「ストレチンス



第2図 アムール川(黒龍江)上流のシルカ川, アルグン川水系
 (The Times Publishing Co. (1959), *Atlas of the World*. Vol. II, Plate 38の一部転載)

ク」に逗留した。ここに在勤の陸軍大佐などからも、「支那政府ハ支那人ノ魯領ニ入テ使用セラル、ヲ固ク禁ズルヲ以テ「アムール」ノ沙金場ヲ開採スルニ甚タ不都合タリ云々」といった注目すべき情報を得ている。もしそうであるとすれば、カリフォルニアの場合などと対比し、まことに興味深い。「アムール」社の汽船で、9月13日12時半「ストレチンスク」を離れ、その日の夕方7時にシルカ川右岸の「ウスカラ」村に停泊した。この9月13日の条には、次のような興味深い記述をみる。

「ウスカラ」駅ノ付近ニ沙金場四ヶ所アリ、共ニ帝家ノ所有ニシテ宮内省ノ手ニテ之ヲ洗フ、機械ハ六個ニシテ共ニ水車ヲ用ユ、然レトモ水ハ甚タ少ナキヲ以テ往々休業スルトキアリ、第一ヶ所ハ駅ヲ距ル十五「ウォルスト」、第二ハ十九「ウォルスト」、第三ハ二十四「ウォルスト」、第四ハ貳拾九「ウォルスト」ノ処ニアリ、人夫ハ平人八百人、罪人六百人許ナリ、四ヶ所ニテ一ヶ年採ル所ノ金ハ約貳拾五「ブード」タリ、砂中含金平均百「ブード」ニ付金一「ゾロトニク」タリト云フ、此沙金場ハ三十五年前ヨリ開採スル所ニ係ルト云フ、「ウスカラ」村辺ハ罪人ヲ流ス所ニシテ五ヶ所ノ獄アリ、而シテ「ウスカラ」駅ニモ一ヶ所アリ、沙金場ノ一役云ク「アルグン」河（支那所謂庫倫河）ニハ沙金場甚タ多シ、左岸ハ魯領ナルヲ以テ開採ニ従事スト雖トモ支那領（即右岸）ノ方ハ下手スル者ナン、故ヲ以テ魯人往々密ニ支那領ニ入り含金土ヲ穿チ木皿杯ヲ以テ小洗スル者アリ云々、○「ウスカラ」駅付近ニアル罪人ノ数ハ大約并テ三千人ナリト云フ」

このように罪人を使役する官営の「沙金場」の様子を示すが、後の北海道の幌内炭鉱と空知監獄の関係を想起する。また国境をなす河川にて、中国領側の右岸では砂金採取に手をつけるものがないので、ロシア人が密入国して洗金したという記述は興味深い。

さて、9月15日には、シルカ川とアルグン川の合流点下流のアムール川に入ったが、「偕我船モ黒龍江

ニ入りタレバ何トナク家郷へ一步近ツキシ心地セリ、且ツ年来黒龍江ノ名ヲ聞キシコト久シカリシガ今日自ラ流ニ順テ下リ宿志ヲ遂ルヲ得タレバ予ガ悦ビ知ルベシ」のように、その折の心境を記している。そしてこの15日の午後6時に、「上」^{ウエルフニ}「アムール」社沙金場ノ役所」がある「ジェレンヂンスク」という場所に停泊した。この上「アムール」社の有する「沙金場」に関しては、次のような詳細な記述がみられる。

「午後6時「ジェレンヂンスク」ト云フ處ニ船ヲ停ム、是処ハ上^{ウエルフニ}「アムール」社沙金場ノ役所アル処ニシテ家屋ハ木製ナレトモ欧州風ニテ揚り場及道傍モ木ヲ敷キ甚華潔ナルコト「アムール」中第一ナリト云フ、「アムール」河岸ニスル場所アリトハ真ニ意外ナリ、家屋ハ五六軒ニ過ギザレトモ道幅モ正シク荒陬中ニ開花世界ヲ現出セシモノナリ、此処ヨリ壹百八「ウォルスト」奥ニ全社ノ沙金場アリ、即チ予ガ所持ノ「アムール」地方ノ沙金場ノ書ニ載スル所ナリ、全社ハ此処ノ外ニ尚明日経過スベキ「チェルナエワ」ト云フ駅ノ奥ニモ沙金場ヲ有セリ、是ハ昨年ヨリ開採セシモノニテ昨年ハ金十八「ブード」ヲ得タリ、本年ハ二十「ブード」ヲ得ル見込ノ由、偕全社ノ「ジェレンヂンスク」村ノ奥ニ有スル沙金場ハ「ジェレンド」ト云フ小河（即チ「ゼヤ」河ニ入ル一小河ナリ）ニアリ、故ヲ以テ此処ヲ「ジェレンヂンスク」ト名付シ也、予同行ノ独乙人ト同道ヨリ登陸セシニ同氏ノ旧相識ナル英ノ「インシェニール」^註（技師）ニ逢フ、乃チ相伴テ上「アムール」社ノ役所ニ至リ「メネーヂェル」（魯人ナリ）^註（支配人）ニ面会シ沙金場ノ図並ニ金粒ヲ一見セリ（中略）「インシェニール」云ク全社ハ沙金場六ヶ所ヲ有セリ、共ニ水極少ナキヲ以テ蒸気機関ヲ用ユ、然レトモ全ク水涸レノトキハ休業セザルベカラザルヲ以テ、此トキハ「トルフ」^註（泥炭）ヲ取除クニ従事セシムト云々、又云ク同社ハ沙金場ノ馬ヲ飼フ為メ毎年十二万「ブード」ノ「オーツ」^註（燕麦）ヲ「ブラゴウェスチンスク」ヨリ取寄スルト、又云フ同処ノ沙金場ハ五月十

五日（魯曆）ヨリ始メ洗金ハ九月十五日ニ終ルト、又云全社ハ金及他ノ要品ヲ運輸スル為メ汽船四艘ヲ有シ中ニ壹百馬力ノ汽船一隻アリ」

このように、上「アムール」社の経営する「沙金場」における洗金のシーズンや蒸気機関・馬力使用などの様相に言及している。この9月15日の夜は「アルバチン」駅の前で泊舟し、上陸して電信局を訪ね、子息の榎本金八らへ電信を送った。ここはかつてロシア人と中国人の戦った場所で、家数は「二三百軒」もある村なりと記す。この9月15日の日記の最後に、「○本日聞得タリ、「アルバチン」ヨリ五十一「ウォルスト」ノ処ニ「ベトノワ」村アリ、茲処ノ奥ニ「ブルガリー」ト云フ小河アリ、「ブーチン」氏ノ明年ヨリ取掛ラントスル沙金場即是ナリト」とある。

翌9月16日早朝、「アルバチン」を離れ下ると、アムール川の川幅広くなり、「処々ニ「カザク」ノ貧村アル」を見た。そして午後2時ごろ、「ウルチギート」という場所に至っているが、ここに関して次のような記がある。すなわち、「此処ニ上「アムール」社沙金役所アリ、此処ヨリ壹百二拾「ウォルスト」奥ニ「ウルチギート」ト云フ小河アリテ沙金ヲ洗ヘリ、此「ウリチギート」ノ役所ハ「アルバチン」ヨリ百六十「ウォルスト」ナリト云フ、夫ヨリ凡ソ十四五「ウォルスト」ニシテ又「チェルナエフ」ト云フ所アリ、此処モ上「アムール」社沙金ノ役所アリ、戸数約五十軒許見ヘタリ、即チ此奥二百十「ウォルスト」ノ処ニ沙金場アルナリ」と記す。

9月18日夜2時に「ブラゴウェスチンスク」府（ブラゴベシチェンスク）に着いているが、この日は中国側の愛輝（愛輝）を訪ねるなど、日記の内容はきわめて詳細にわたった。しかし、「沙金場」関係の記述は、9月16日の記を最後に、一応見出しえなかった。9月21日の午後8時ごろ「ハバロフカ」（ハバロフスク）に着いているが、この日の日記に、アムール川に関する次のような記述をみる。

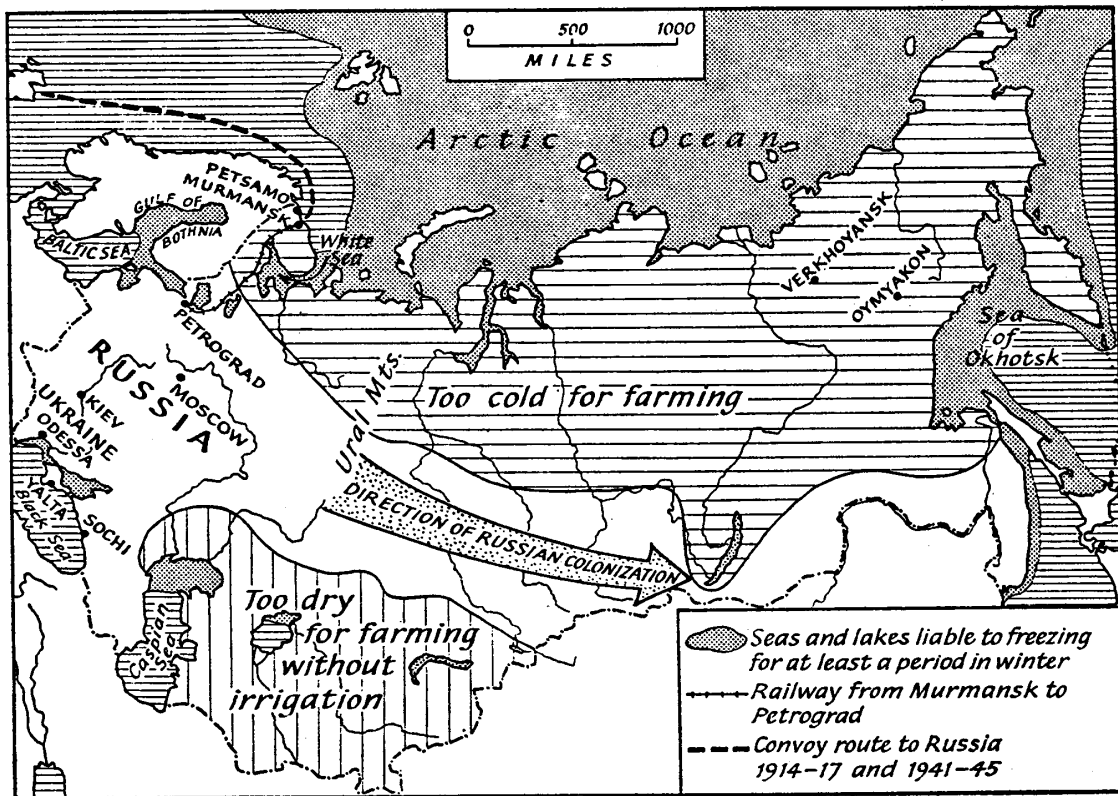
「「ストレチェンスク」ヲ発シテヨリ九日ニシテ着

船セシコト定期ノ如シ、回考スルニ黒龍江濤筋ハ黑夜泊舟サヘスレバ決シテ乗り難キ処ニアラズ（中略）両岸ハ薪ニ富ミ水ハ清クシテ魚族ニモ亦富メリ、実ニ亜細亜中屈指スベキ大良河ニシテ欧州ノ「ダニューブ」北米ノ「ミシシッピー」ト直ニ比較シ得ル者ナリ、魯ノ数百年前ヨリ注目シテ遂ニ之ヲ掌握セシモ尤至極ナルコトナリ、況ヤ「シベリヤ」ノ豪賔ニシテ金土ニ富メルニ於テヤヤ」

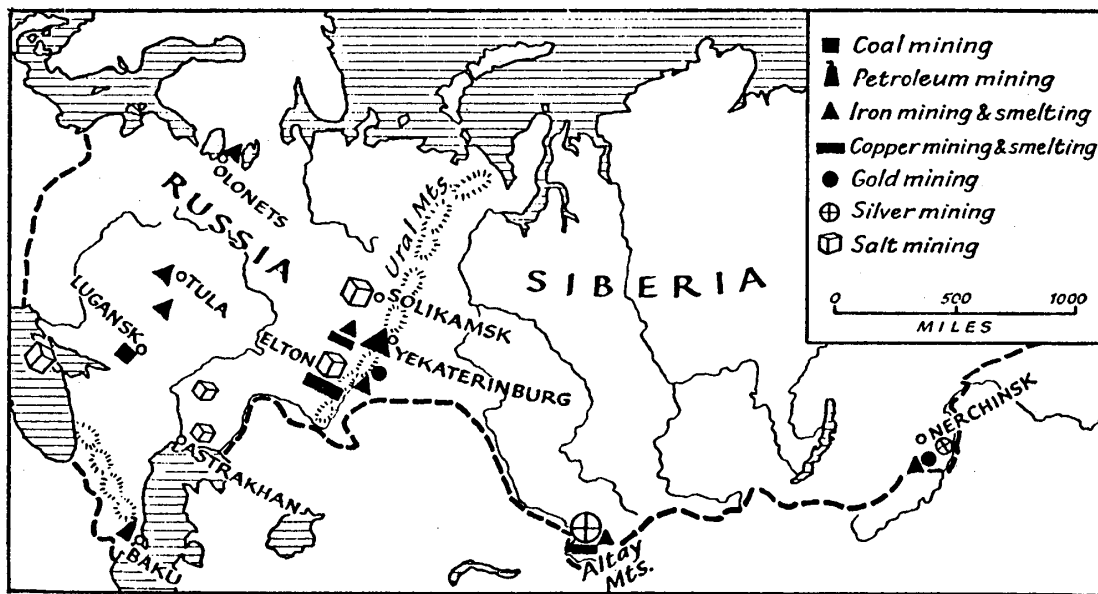
5. シベリアの鉱山業フロンティア

以上、『シベリヤ日記』にみる「沙金場」関係の記述を断片的ながら追ってみた。かかる記述にとくに着目したのは、それらを通して、19世紀におけるシベリアの鉱山業フロンティア（mining frontier）の様相を窺知することに資したかったからである。19世紀、世界的な産金地をなすシベリアの砂金採掘地域は、いわゆるフロンティアの一類型である鉱山業フロンティアとしての視角から把握されうると考える。

16世紀の後半、ウラル山脈を越えてロシア人の東進が開始されたが、“シベリアの都市の母”と称されるチュメニに、シベリア最初のロシア人の要塞が築かれたのは1586年であった。そして早くも1639年には、ロシア人はオホーツク海沿岸に到達している。1650年ごろにはアムール川流域に進出し、清国との間に緊張関係を生んだが、1689年のネルチンスク条約などで国境問題の調整がなされた。このように、ロシア人のシベリア大陸東進のスピードと距離には著しいものがあり、アパラチア山脈を越えてヨーロッパ人が北アメリカ大陸を西進した場合さえもその比ではなかったと、W.H. パーカーも指摘している⁹⁾。なお、19世紀以降におけるロシア人のシベリアへの大規模な移住運動については、例えばM.W. マイクセルが、かのD.W. トレッドゴールドの著作を取り上げ、アメリカ西漸運動と対比しながら言及している¹⁰⁾。また、マイクセルは、ロシアのフロンティアが中国のフロンティアと対峙、衝突した問題にも触れ



第3図 厳しい寒冷と乾燥の不毛地帯の間を東進するロシアの植民
 (Parker, W.H. (1968): *An Historical Geography of Russia*. p. 22, fig. 6 転載)



第4図 1815年当時におけるロシア帝国の鉱山地
 (Parker, W.H., *op. cit.*, p. 163, fig 40転載)

ている。

ともあれ、広大にして厳しい自然条件のシベリアは、帝政ロシアのフロンティア、いうなれば隔絶した辺境の地としての歴史をたどってきた(第3図)。かかる性格を最も特色つけるものとして、シベリア流刑の制度をあげることができる。早くも17世紀には、レナ川流域のヤクーツク地方などに逃亡農民の流刑地がみられ、流刑農民をシベリア開拓に利用する意図も窺われた。かの榎本武揚も旅した、イルクーツクに至るシベリア街道は、1689年以後、主として囚人労働力によって建設された。そして、1763年以後、このシベリア街道筋に、エタブなどと呼ぶ宿営監獄が整備されはじめた¹¹⁾。さらに19世紀に入ると、シベリアは政治犯の流刑地としても著名となり、また急増した囚人労働力は、シベリアの開拓に重要な役割を果たした。1891年にはシベリア鉄道の建設が開始されたが、20世紀初頭にかけてのその建設工事には大量の囚人労働力が動員された。なお、かの岩倉使節団が利用したアメリカ大陸横断鉄道は、シベリア鉄道よりかなり早い1869年に全通したが、シエラネバダ越えの難工事などは中国人労働力によって進められた。

ところで、かのフロンティア学説で著名なアメリカのF.J. ターナーは、別稿でも検討したように、毛皮商人のフロンティア、牧畜業者のフロンティア、鉱山業者のフロンティア、農民のフロンティアといったように、フロンティアを典型的にとらえている¹²⁾。シベリアにおいても、まず毛皮商人のフロンティアの展開がみられ、シベリア原住民に対しても、当初、毛皮税(ヤサーク)を課するといった形態で帝政ロシアのシベリア支配は進められた。毛皮貿易の衰退にとって代わって、18世紀には、アルタイ地方(Kolyvan mines)やザンバイカル地方(Nerchinsk mines)において、銀山などの鉱山開発の台頭をみた(第4図)。さらに19世紀には、『シベリヤ日記』にも頻繁に登場する「沙金場」の開発が各地で進められ、いわゆる

シベリアのゴールド=ラッシュの展開をみるに至った。このように、毛皮商人のフロンティアに続いて、とくに鉱山業者のフロンティアの展開がシベリアにおいて注目される。なお、1861年の農奴制の廃止によって、農民のシベリア移住が急速に進められ、西シベリアの穀倉地帯の形成を導いたことは周知のことである。かかる場合の農民のフロンティアも、シベリアのフロンティアの一類型として重要であることはいままでもない。

さて、シベリアのゴールド=ラッシュについては、例えばW.P. モレルが著書『ゴールド=ラッシュ』の「第3章シベリア」¹⁴⁾で詳述している。そのなかで、モレルはあえて「鉱山業フロンティア」という用語を使用しないまでも、ウラル地方のほか、エニセイ川、レナ川、アムール川などシベリアの諸水系産金地にみられた鉱山業フロンティアの様相について興味深い記述を展開している。東シベリア総督の報告によれば、1842年当時、東シベリアで稼行されていた砂金場は58か所、認可を受けながらまだ稼行していないもの273か所、認可申請中のものが1,500か所に及び、産金高は350,000オンスを数えたという。

武揚もエニセイ川水系の東シベリアに入るや、真先にクラスノヤルスク近くで産金地を見学したが、このエニセイ川の諸支流でとくに産金の増加が目立った。シベリアの産金高は、1847年に一つのピークを記録し、962,300オンスに達したが、そのうち東シベリア産が735,000オンスをも占め、急激な産金増加を示している。さらに1850年代に入り、『シベリヤ日記』(9月13日)の記述などにもみる、アムール川支流シルカ川流域におけるネルチンスク地方などで、産金が目立った。1853年からシベリアの産金は再び増加に向かったと、前記のモレルは記している。アムール川水系とともにレナ川水系の産金地も脚光を浴びに至った。武揚がシベリアを旅した1870年代は、従来より高いレベルで産金増加がみられ、1880年には1,392,000オンスと最高の産金高を記録したという。

かかるモデルの記述に従えば、武揚一行はシベリアの産金ラッシュ期に旅したことになるが、『シベリア日記』にみる「沙金場」の断片的な記述だけでも、シベリアの鉱山業フロンティアの様相を垣間見ることも容易でない。しかし、日記にみる「沙金場」関係の記述を、例えば、シベリアにおける未開 (savagery) と文明 (civilization) の接点における「状態」(condition) を示すものとしてターナー流にとらえるならば、¹⁵⁾ それらの記述は、まさしくシベリアにおける当時の鉱山業フロンティアの様相を窺知する上で、一つの拠り所となるであろう。

19世紀後半のシベリアの鉱山業フロンティアは、一見資本主義の様相を示し、とくに東シベリアでは、「巨商ブーテン氏」の砂金場(9月9日)とか、「上アムール社」の砂金場(9月15日)などと日記にあるように、はじめから比較的大きな資本による砂金採掘が目立ち、19世紀末のカナダユーコン地方のゴールド=ラッシュなどの場合と対比し興味深い。また、シルカ川河岸のウスカラ駅付近において、「帝家ノ所有ニシテ宮内省ノ手ニテ之ヲ洗フ」(9月13日)とある官営砂金場、さらにこの官営砂金場4か所の記で、「人夫ハ平人八百人、罪人六百人許ナリ」とある鉱山の囚人労働力のごときは、シベリアの鉱山業フロンティアの特異な様相を示すものとして注目されよう。なお、シベリアの鉱山で働く囚人の生活様相は、きわめて苛酷なものであったと一般に伝えられているが、¹⁶⁾ 日記には、前記のように囚人労働力の使役を示すだけで、かかる生活様相についてはなにも触れていない。ましてやモデルが取り上げている、政治犯の登場などで、荒野(wilderness)のなかの採金地の社会生活にどのような変化がみられたかなど、日記では知るすべもない。

さらに、9月12日の日記にあるように、中国人がシベリアの砂金場に登場しなかったとすれば、カリフォルニア、オーストラリア、ニュージーランドのゴールド=ラッシュなどの場合と対比し、やはりこ

のこともシベリアの鉱山業フロンティアの特異性を示すものといえよう。日記には、中国人がシベリアの鉱山で働くことを中国政府が禁じていたので、「アムールノ沙金場」を開採するのに非常に不都合であった云々とある。

さて、9月15日の日記には、「上アムール社」の砂金場作業期間が魯暦で5月15日から9月15日までであることを示すが、一般に短い夏の期間に、背後の定住集落からかなり離れた砂金場に殺到した。9月9日の日記には、「此処ハ夜中モ働クナリ」などと、限られた稼行期間における、「巨商ブーテン氏」の砂金場の様相を示している。砂金場の所有者である「巨商ブーテン氏」は、人口約3,500、人家400軒ばかりの一小府であるネルチンスクに館を構えてこの地域の商業的実権を握り、砂金場の方は番頭などにまかせていた。このようにネルチンスクなど文明地域の縁辺に、砂金場が位置していた様相が、日記の記述などから察することができる。

モデルが前記著書のなかで指摘しているように、シベリアのゴールド=ラッシュは、たしかに隔絶したタイガの原生林地域に人間が進出する契機を与えたが、所詮、それは金のみを採掘するためで、それらの地域を永久的な居住地に変えるためではなかった。

以上、『シベリヤ日記』にみる「沙金場」関係の記述を中心に、若干の検討を加えたが、文字通り、皮相な内容に終始した。本稿を契機に、今後、シベリアの鉱山業の歴史地理に一層関心を深めていきたいと考えている。

注

- 1) 川崎 茂(1980): シェラネバダ越え周辺の歴史地理——1846—70年代——。広島史学研究会編『史学研究五十周年記念論叢 世界編』福武書店、451—477。
- 2) 本稿での『米欧回覧実記』に関する引用は、すべて田中 彰校注の岩波文庫本(一)・四(1977・1980)

によった。

- 3) 本稿における『シベリヤ日記』からの引用は、すべて1939年に南満州鉄道株式会社総裁室弘報課から発行された活字本によった。
- 4) 加茂儀一(1960):『榎本武揚——明治日本の隠れた礎石——』中央公論社, 299ページ。
加茂儀一編(1969):『資料 榎本武揚』新人物往来社, 418ページ。
前掲3)の活字本にも、榎本武揚の「小伝」を掲載(15~17)。
- 5) 前掲4)加茂儀一編書(1969)に収録(51~90)。
- 6) 前掲4)加茂儀一著書(1960)に収録(193~199)。
- 7) 前掲4)加茂儀一著書(1969)に収録(3~50)。
- 8) 前掲3)の活字本に、榎本春之助の写本に掲載された「追記」を掲げる(8~11)。そのなかの「左記手紙」。
- 9) Parker, W.H.(1968): *An historical geography of Russia*. University of London Press Ltd., 103~104.
- 10) Mikesell, M.W.(1960): Comparative studies in frontier history. *A.A.A.G.*, 50, p. 67.
[Treadgold, D.W.(1957): *The great Siberian migration: Government and peasant in resettlement from emancipation to the First World War*. Princeton Univ. Press, 278pp.]
- 11) 加藤九祚(1974):『シベリアに憑かれた人々』岩波書店, 163~164.
- 12) 川崎 茂: 鉱山業フロンティアの諸相。米倉二郎監修『集落地理学の展開』(仮題) に投稿中, 大明堂から1987年に発刊予定。
- 13) Turner, F.J.(1920): *The frontier in American history*. Henry Holt and Co., p. 12.
- 14) Morrell, W.P.(1968): *The gold rushes*. Dufour, Chester Springs, Penn., 43~73.
- 15) Turner, F.J., *op. cit.*, p. 3, p. 10.
- 16) 例えば, 相田重夫(1966):『シベリア流刑史—苦悩する革命家の群像—』中央公論社, 191ページ。